

地域情報（県別）

【山梨】「へき地にはロマンと地雷が埋まっている」ベテラン医師が語る真意-市川万邦・南部町医療センター所長に聞く ◆Vol.3

2020年5月22日 (金)配信 m3.com地域版

南部町医療センター（山梨県南部町）所長の市川万邦氏はこの10年間、へき地医療の質を高めたいと医療職や行政を巻き込みながらさまざまな活動を行ってきた。それらがへき地医療に尽力する医師を称える「第5回やぶ医者大賞」の受賞に当たっても評価された。多職種連携の場づくり、精神科誘致や認知症を学ぶ講演会の開催、健康情報をまとめるファイルの作成…。市川氏は今、へき地医療に携わる魅力をどう感じているのか。「へき地にはロマンと地雷が埋まっている」と話す真意は――。（2020年2月18日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら

――「在宅医療は多職種連携が大事」とよく聞きますが、先生は関係者が定期的集まる場をつくったそうですね。それまではなかったのでしょうか。

はい。私が南部町医療センターの所長に就任した翌年の2011年に「南部町在宅医療連携協議会」をつくりました。それまでは行政が主導で年に1、2回行われるようなものはあったそうですが、それよりも頻繁に、気軽に集まれる場はなかったと聞きます。

きっかけは、南部町の訪問看護師とケアマネジャー、保健師の方が「顔の見える関係をつくりたい」と相談してくれたことです。私も一人診療所の道志村国民健康保険診療所に勤務したときに、在宅医療における多職種連携の重要性を感じていましたから、「ぜひやりましょう」と応えました。あとで聞いた話では、医師にはどこか近寄りたがいイメージがあったようで、こんな相談がしづらかったそうです。

同協議会は設立以来、月に1度のペースで開いていて、明日で105回目を迎えます。医師や看護師、ケアマネジャー、保健師、管理栄養士、ホームヘルパーが15人くらい集まり、症例検討など特定のテーマについて話し合います。配食サービスを行う町のお弁当屋さんに介護食について説明してもらったり、人工呼吸器のメーカーの人に機械の操作方法を教わったりすることもあります。



市川万邦所長

――協議会発足は周囲からの相談がきっかけだったのですね。在宅医療や家庭医療に取り組む医師の中で「相談しやすい存在であるよう気を配っている」と話す人がいました。先生もやはり意識されているのでしょうか。

そうですね。堅苦しいのは嫌ですし、何より私たちの目標は患者さんが幸せに暮らせることなので、それを叶えるためにもコミュニケーションを密にして情報を共有し、連携していくことは不可欠だと思います。スタッフは私に対して普通に接してくれているように見えますが、それでも実は医師という職業を理由に気を遣っているかもしれません。

そんなことを今でも想像しながら、なるべく話しやすい雰囲気をつくろうと心がけています。敬語を使い過ぎないようにしたり、ときに方言や笑いを入れたり。「楽しそうにしている」ことも意識していることです。実際に楽しんで仕事していますが、それを周囲に見せることも大切なこと。医師が思い悩んでいるようだと周囲は話しかけづらいですし、不要な気遣いをされる可能性も高くなってしまわないでしょうか。

——協議会の取り組みを通し、南部町医療センターに精神科を誘致したと聞きます。これは大きな成果だと感じました。

発足して間もないころに出た話で、各職種の困ることに「認知症への対応」がありました。南部町の高齢化率は4割を超えていて、高齢患者がとて多いたのが特徴です。必然的に認知症の疑いがある患者さんも多くなりますから、認知症を町の医療機関できちんと診断をして、相応の対応を取れるようにした方がいいだろうと皆の意見が一致しました。

そこで私は事務長を通して町の役場で検討してもらいました。結果、1年後に峡西病院（南アルプス市）の精神科の先生に月に2回、来ていただけるようになり、それは8年経った今でも続いています。認知症の疑いのある人が診断されて一定程度は管理できるようになりましたし、また地域の中でこの病気について知ろうという雰囲気ができたように思います。実際、2013年に認知症について学ぶ「みんなで考える認知症の会」が立ち上がり、年に1回のペースで講演会を開催、今では150人ほどが参加する、町では大規模な催しになりました。

——その一方で、在宅酸素患者のリストアップや小児救急講演会など細やかな活動もされています。

2014年に起こった豪雪の際、災害対策の一環として在宅酸素患者をリストアップしました。町内のどこに何人の患者がいるか情報収集し、それを生かして長期間の停電が起きたときにある患者さん宅にバッテリーを持って行きました。結果的にそのバッテリーはうまく機能しなかったのですが、役場の自家発電できる場所までその方を避難誘導できたのは、事前の情報収集が功を奏したと言えるのではないのでしょうか。

小児救急講演会は小児科専門医としての私の経験を生かしながら行っているもので、都留市立病院時代に一緒に働いた小児救急看護の認定看護師と一緒に小さな子どもを持つ親御さんに向け、知っておいてほしいこととお話しています。お子さんの成長サイクルを考えておよそ2年に1度のペースで開いています。

それと、私は医師でありながら町の職員でもありますから、町が推進する健康関連の取り組みにも協力しています。健康教室を開催したり、健康に関する情報を整理できる「なんぶ健康ファイル」を作ったりしていることが活動の一部です。このファイルは保険証や診察券、健診結果をまとめてファイリングできるもので、町内の各世帯に無料で配布しています。これからは患者の健康に関する情報をデジタルで一元管理する時代になっていくと思うのですが、高齢者の多い南部町ではこのようなアナログな対策も依然として必要でしょう。



健康関連の情報をまとめられる「なんぶ健康ファイル」

——今回、出張診療や訪問診療にも同行させてもらい、へき地医療の魅力の一端を体感できました。改めて、先生の言葉でその面白さを聞かせください。

率直に、「お客様」と思われたいこと、私も南部町の一員だと思ってもらえることです。地域の人たちと一緒に生きている感覚が得られ、大きく言えば、医療を通して地域づくりに携われるように思います。

患者さんが来て、薬を出して、「ではまた1カ月後に」に留まらず、より深い関係に入り込めることが私はうれしいですね。地域のことを知っていれば、「この前、あの地区でクマが出たらしいから気を付けてね」と話せますし、ご

家族のことを知っていれば、「お孫さんが今度入学だね、楽しみだね」と喜びを共有できます。患者さんから、地域の人から「おらが町のお医者さんだよ」と思ってもらえることが一番の魅力ではないでしょうか。

——最後に、読者である医療関係者に伝えたいことがあればメッセージをお願いします。

昨年の5月に開催された「第10回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会」で、ある先生が「へき地にロマンは埋まっている」と発言していました。私は、地域医療、特にへき地勤務は、自分の活動でロマンにも地雷にも変わるのだと感じています。

取材ではいいことを多く話しましたが、過去には嫌なこともありました。今でも忘れないのが、義務年限時代、ある職員に「罰ゲームと違って来ているのだろう」と言われたことです。酒の席だったことも影響しているのですが、「嫌々ここで医師をしているのでは」と言われ、大きなショックを受けました。普段、私はあまり感情的にはならない方ですが、このときは…。そんな風に見られていたのかと。

仕事とプライベートの区別がつきづらいことも特徴です。私は急患対応のために診療所にかかってくる電話を携帯電話に転送しているため、休日も電話がかかってくることがありますし、また自宅は南部町医療センターのそばにあって患者さんも知っていますから、夜、私たち家族が帰宅した直後に電話がかかってくることもあります。おそらく、自宅に明かりがついたことを確認したのでしょう。

私はこれらのことを特に嫌だとは思いませんが、人によっては「地雷」と思うのではないのでしょうか。やはり向き不向きはあると思いますが、向いている人にとってへき地医療は多くの「ロマン」が埋まっているのも事実。私もこれから一層、素敵な経験ができればうれしいですし、興味のある先生にはぜひ挑戦していただきたいと思います。

◆市川 万邦（いちかわ・まほ）氏

1995年自治医科大学卒。山梨県立中央病院で研修を受けた後、都留市立病院や道志村国民健康保険診療所に勤務し、総合診療や在宅医療の経験を重ねる。自治医科大学の義務年限を終えた後は、自治医科大学とちぎ子ども医療センターと国際医療福祉大学病院で小児医療の経験を重ね、小児科専門医の資格を取得。2010年に南部町医療センターの所長に就任、行政や医療・福祉の多職種と協力しながらへき地医療に携わる。2018年にはへき地医療に尽力する医師を称える「第5回やぶ医者大賞」を受賞した。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

